

## 女性医師の窓

## 双身赴任 in 京都

小森耳鼻咽喉科医院  
白井 明子

「メールどすえ。はよ、みておくれやす。」

夫からのメール受信を、私の携帯がはんなりと知らせてくれます。

修学旅行以外に縁のなかった京都への憧れもあり、舞妓さん風の可愛らしい響きも心地良くて、何気なく選んだ受信音です。その京都にまさかご縁が生まれるとは思ってもせずに設定していました。

夫とは結婚して13年になりますが、結婚当初の数カ月遠距離だったことを除いては、他県への転勤もなく同居することができ、このまま家族揃って過ごせるかもしれないと安堵していました。

ところがある日、「もしもし…」と神妙な声で夫から一本の電話が。

「もしかすると転勤かもしれないんだ…。京都に…。」

「きょうと？ えっ？ どうして京都？」

京都に単身赴任?! 転勤に対し鈍感になっていた分、頭の中は大混乱でした。三人の子供たちを一人で育てられるのか、家族の時間を大切にできる夫が単身赴任なんて本当に大丈夫なのだろうか…。

動揺する私を一番励ましてくれたのは、明るい友人たちの前向きな一言でした。

「あらー、いいがいね。京都近いし。みんなで遊びに行ったら。」

「別居生活かあ。大変やね。でも新鮮かもねーっ。私も京都行きたいわあ。」

そうなのかな、京都いいのかな。別居も新鮮ですか。そうかもね、いいかもね!

昔から良く言えば素直な私は、友人たちの励ましのお蔭で、京都生活を楽しもう!と前向きになっていきました。ただ、残る問題はやはり夫の日々の生活です。一人で暗い部屋に帰宅する寂しげな夫の背中が目に見え、どうしたものかと考えに考えました。

そしてある時、ついに閃きました! 最強の助っ人、栃木の義母がいてくださることに気付いたのです。一筋の希望の光が差した瞬間でした。

しかし、栃木を離れたことのない義母が同行してくださるのか。こんなことを凶々しく頼んでよいものか。迷いながらも私は夫に相談し、そして夫が思い切って直接義母に相談しました。

「お母さん、京都と一緒に来てくれないか。」

「あら京都! すてきだねえ。行ってみようかしら。」と、思いもかけないご快諾!

そして今年4月から、夫と義母は京都にて22年ぶりの親子生活を開始しました。義母は買物に、炊事に、洗濯にと奮闘してくださっています。どれだけ感謝しても感謝しきれないくらいです。膝や腰が時々痛む中、大変な労働ですが、ホームドクターである夫が血圧も含め丁寧に健康管理しています。夫が料理に挑戦することもあり、料理の写真付きメールが送られてきます。親子2人3脚で邁進中です。

「また椎茸買ってきたの? きのこだらけだよ。大根も人参もほら、こんなにあるよ。馬じゃないんだから。お母さん、ちゃんと家にある食品をチェックしてから買い物行かないと。」などと息子から指摘され、

「あらー、忘れちゃったー。そうだったっけー。」と可愛らしく微笑む義母。

義母も住み慣れた栃木を離れ、御苦労が多いと思います。でも血の繋がった親子ならではのどこか微笑ましいやりとりを、天国にいる義父も笑いながら眺めてくれているように感じます。

栃木から京都に移って金沢との距離も近付き、祖母と孫のふれあいも増え、これまでになかった幸せも芽生えています。今となると、この生活も何かの運命だったような、義父が引き合わせてくれたような、不思議な巡り合わせを感じます。

京都生活はまだ始まったばかりですが、幸多き日々を重ねられるように、家族皆で力を合わせて乗り越えていこうと思っています。